

【学会報告】

The 15th Asian Society for Adapted Physical Education and Exercise in Malaysia に参加して

菅嶋康浩 *1

I. はじめに

2018年7月11日から13日の日程で、マレーシア国立マラヤ大学スポーツセンターにて The 15th Asian Society for Adapted Physical Education and Exercise (アジア障害者体育学会、以下 ASAPE2018)」が開催された。昨年度、筆者は韓国大邱市で開催された国際障害者身体活動連合 (IFAPA) が主催する国際障害者身体活動学会大会 (ISAPA2017) に今回のテーマの基礎となるアルペンチェアスキーのターンでのアウトリガー操作に関する研究を発表しており、今回はその継続研究の成果を発表するために参加した。

II. 学会及び開催会場

ASAPE 大会は2年毎に開催される国際障害者身体活動連合 (IFAPA) の世界大会の間で2年ごとに開催される IFAPA の加盟国及び加盟団体によって行われるアジア地域の連合会の大会である。今回、「Characteristics of Operation in Sequential turns with Different Depths on Alpine Sit-Ski」と題して ASAPE2018 に共同研究者の本学科加藤尊教授及び本田亜紀子准教授とともに参加した (図1)。

学会会場となったマラヤ大学はマレーシア最初の大学で、マレーシアの首都クアラルンプールの南西に位置し、750 エーカーの広大なキャンパスを有するマレーシア随一の最高学府として知られ、世界大学ランキング87位 (東京大学は23位) でトップ100入りしているアジア有数の大学である (<https://www.um.edu.my/>、図2)。開催されたマレーシアの首都クアラルンプールは、日本から約5,300km離れていて、日本とは1時間の時差がある。我々は7月10日16時に中部国際空港を出発し、香港経由でクアラルンプール国際空港に翌日11日0時30分ごろに到着した。トランジットの時間を含めると9時間近くの



〈図1〉 The 15th Asian Society for Adapted Physical Education and Exercise (ASAPE) in Malaysia (<http://www.asape2018.com> より抜粋)



〈図2〉 国立マライ大学 (<http://www.asape2018.com> より抜粋)



〈図3〉 クアラルンプール国際空港到着

受付日 2019.2.25

*1 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科

飛行時間を要した。さらにホテルまで1時間、就寝は2時をはるかに回っていた。結構な長旅であった(図3)。

Ⅲ. 学会発表

11日午後に開催会場のマライ大学スポーツセンターに到着して参加登録を済ませ、程なくして、ASAPE 会長 Prof. Dr. Ki-Young Park 氏の開会宣言によって3日間の学会大会が開始された。学会大会には、マレーシア、韓国、中国、日本などアジアの国々より、障害者体育スポーツの著名な専門家が集まり、障害者体育教育、指導者養成及び障害者身体活動について各国の現状と課題、今後の展望について話題提供された。また障害者スポーツの最新の知見、動向について話題提供がなされた。3日間でキーノートレクチャー3題、ワークショップ2題、一般発表62題と国際学会としては小規模ではあるが、アットホームで深いディスカッションがなされる優れた学会であった。今回日本からの参加者も多く、発表演題数も15題を超えた(図4)。



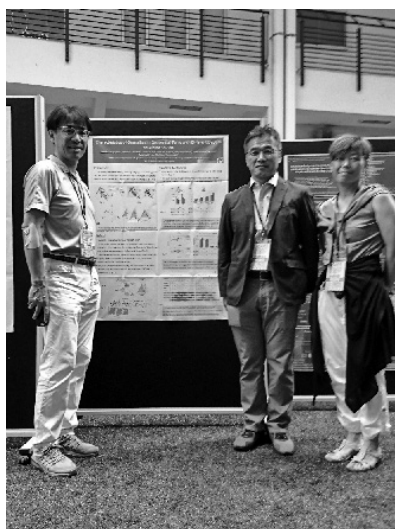
〈図4〉 ASAPE 開会

12日、我々は「Characteristics of Operation in Sequential turns with Different Depths on Alpine Sit-Ski」と題してポスターセッションで発表した。ターンの動作、座圧分布、筋電図を解析し、チェアスキーのターン中のアウトリガー操作と上半身の動きにみられる特徴を報告した。

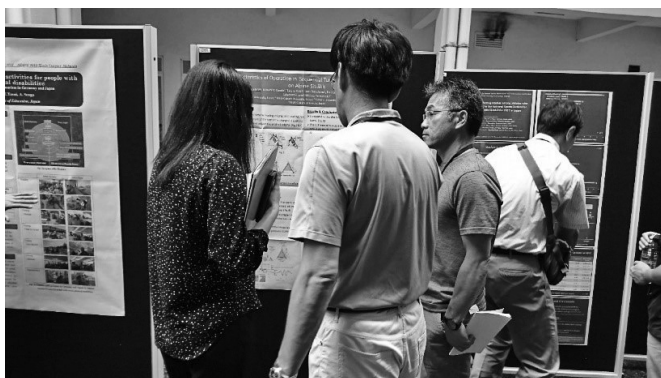
今回の発表では、我々にとって大変素晴らしいお二方との出会いがあった。一人は本大会のバイオメカニクス分野の審査委員であったマライ大学スポーツセンター Senior Lecturer の Dr. Maryam Hadizadeh 氏であった。同氏は我々の前に現れ、大変興味深い内容であるとの講評をいただいた。そして強く関連国際学術雑誌への論文投稿を勧められたのであった(図5、6)。

またもう一人は、上智大学講師の谷口広明氏であった。同氏はパラリンピック障害者スキーアルペン競技日本代表のコーチングスタッフで、パラリンピック代表選手の海外遠征に同行するスタッフであった。現場で生かせるデータが少ない現状において、本研究結果は大変興味深く貴重な研究であるとの講評を受けた。我々にとって、パラスポーツの最前線で活動される同氏との出会いは大変貴重なことであり、今後の研究にぜひ参加したい旨連絡をいただいた。現在、両氏には研究協力者として参加していただいている。

本学会で個人的に興味を引いた発表としては、IFAPA アジア地域代表

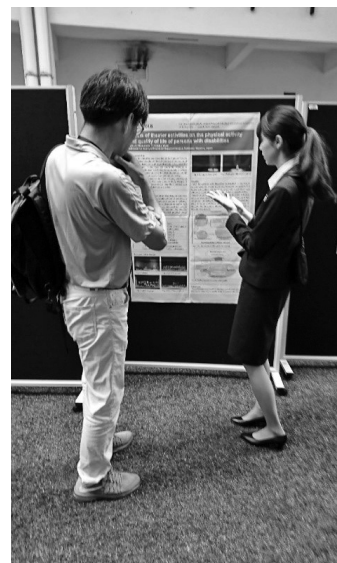


〈図5〉 発表にて



〈図6〉 発表にて (Dr. Maryam Hadizadeh 氏、加藤氏と筆者)

安井友康氏との共同研究の北海道教育大学大学院生の松本なつみ氏の「Effect of theatre activities on the physical activity and quality of life of persons with disabilities」と題した発表があり、舞台活動を通じて障害者の身体活動性やQOLに及ぼす影響を評価した内容で、日本人若手研究者の今後の活躍が期待された（図7）。



〈図7〉学会発表にて
(加藤氏と北海道教育大学大学院
松本氏)

IV. 終わりに

本報告を終えるにあたり、先述したように本学会大会は、我々にとって大変収穫の多い学会であった。今後の研究にしっかりと生かしていきたいと考えている。

また、余談であるが、「マレーシア最後の夜に美味しいものでも」と、加藤、本田両氏と食事処を探していた時、偶然路地で何やら生演奏がにぎやかに奏でられているイベントに遭遇した。我々はわからないまま食事を無料で振舞ってもらったことにあいなった。どうやら自分自身のセレモニーを、親近者だけでなく、通りすがりの人にも祝ってもらおうと主人公のレゲエマンが主催したイベントであった。国民性なのか開放的で、大変楽しくそして幸せなひと時であった（図8）。

我々にとって大変印象に残る学会出張であった。



〈図8〉最終日の晚餐